

## 弱視の子どもは、50人に1人 3歳児健診で発見すれば、早期治療で改善します！

### 子どもの視力の発達と弱視

生まれたばかりの赤ちゃんは、はっきりと物が見えません。生後3か月になると、0.02、1歳で0.2くらいの視力になると考えられています。3歳までに急激に視覚が発達し、3歳で0.6~0.9、5歳以上では1.0以上となり視力は成熟します。

視力の発達する期間（生後から6歳くらい）に、強い屈折異常（ピントが合っていない状態）などがあると、視力が悪い状態のまま発達が止まってしまいます。これを「弱視」といいます。

### 弱視の症状と種類

目を細める、目つきがおかしい（斜視）など、見てわかる症状もありますが、症状が何もない場合も多く見られます。

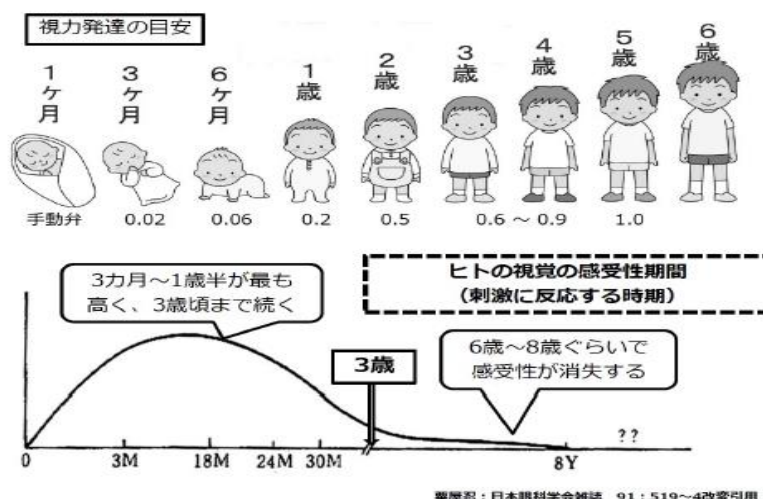
弱視の種類は、不同視弱視（片方の目に強い遠視がある）、屈折性弱視（両方の目に強い遠視や乱視がある）、斜視弱視（片目の視線がズレている）、形態覚遮断弱視（乳幼児期の視覚感受性期に、先天性白内障等により視覚情報が遮断されることによる弱視）などがあります。

### 弱視は治る？

早期発見・早期治療により、治る可能性は高くなります。

治療に対する視覚感受性期は6~8歳くらいまでであり、それ以降は治療に反応せず、一生弱視のままになってしまいます。

満3歳から3歳6か月頃に異常を発見し治療を継続することが出来れば、6歳までにほとんどが0.8以上の視力になり、学校生活では問題ない状態にすることができます。



STOP! 弱視見逃し

